# 越谷市内を流れる明治初期の千間堀

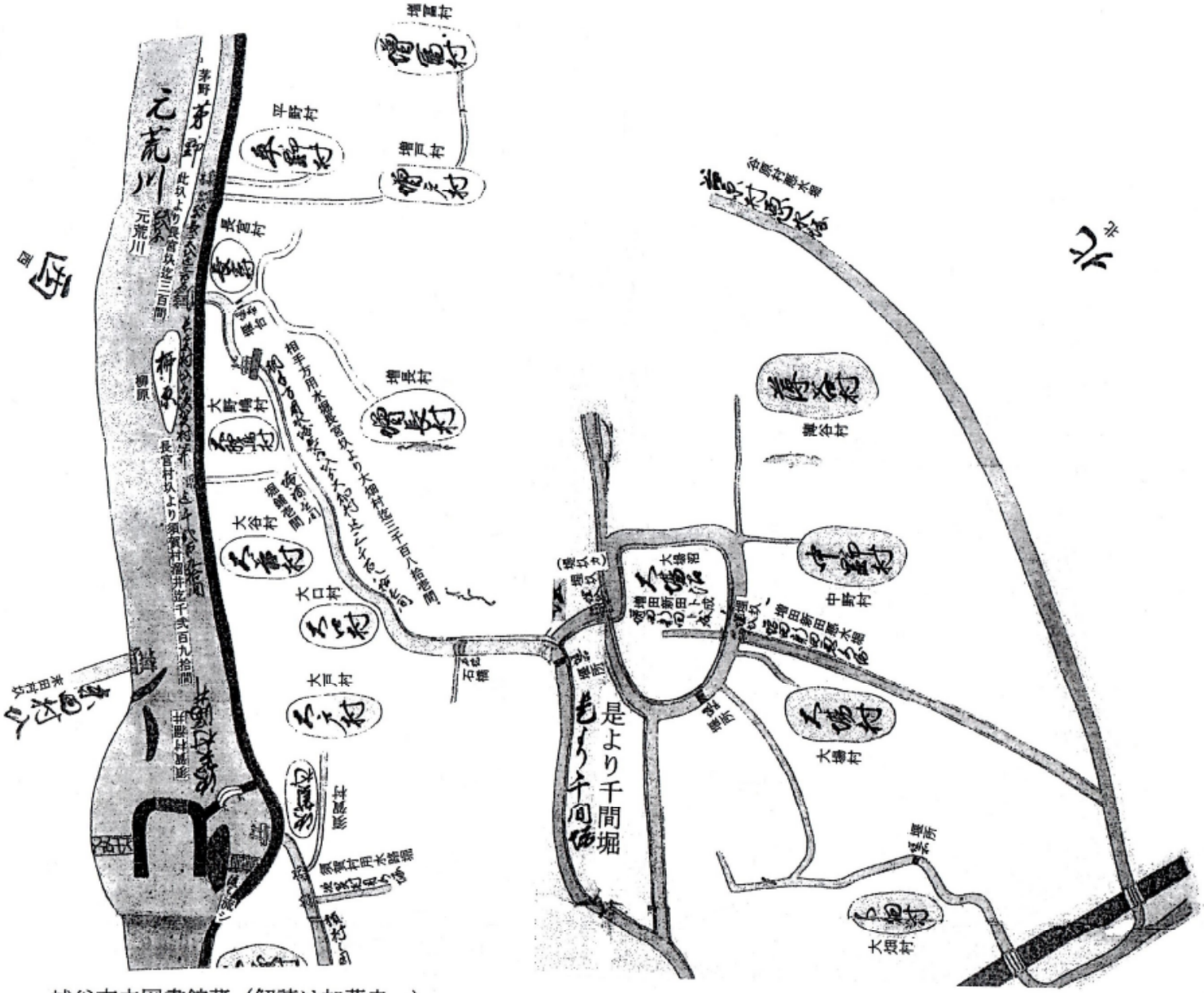
加藤幸一

千間堀は、かつては江戸時代から細流であったが、明治の終わり頃より大正の中頃まで行われた新方領耕地整理の事業によって千間堀の流路をほぼ利用して川幅を広げた新方領堀、現在の新方川ができた。その川幅は東武鉄道が千間堀（新方川）に架かる鉄橋直下の川幅であったであろう。

明治１３年測量の迅速測図「越ケ谷駅」「岩槻町」「粕壁駅」「流山村」をもとに作成（加藤幸一）

# 江戸時代の千間堀上流・1

## 江戸期の絵図（上流地点）




越谷市立図書館蔵（解読は加藤幸一）

**江戸時代から現在まで変わらぬ位置**

1　増田新田の水神社
2　増長の香取社
3　薬師堂
4　墓地
5　墓地
6　大口の香取社
7　恩間新田の香取社(移転前)

恩間新田の香取社は、かつては現在の恩間新田７の小島家あたりにあった。現在は、ここより北東の恩間新田のはずれ大場との境にある稲荷神社に合祀。

**かつての千間堀の流路跡の名残**

三ノ宮１９７１の須賀家そばにある庚申塔や道しるべの石塔は、かつて南方に流れていた千間堀に架かる橋のそばにあったという。この石塔の西側の現在の橋を渡って田んぼの中を舗装された道路を約５０メートル程南に進むと道路が少しくぼんでいることがわかる。その地点がかつての千間堀が流れた流路跡の名残である。地図中には(向かって左上・右下)、移転前のかつての千間堀の橋のそばの石仏の位置と、移転後の現在の千間堀の橋のそばの石仏の位置が示されている。

# 江戸時代の千間堀上流・２

## 明治の迅速測図（上流地点から戸井橋まで）